

大本営発表の成り立ちについての一考察

－ 北九州初空襲の場合 －

藤 澤 秀 雄

A Study on the Announcement of Daihonei

－A Case of first Air Attack for the Kitakyushu－

Hideo FUJISAWA

1 はじめに

太平洋戦争中「大本営発表」は開戦の第1号から終戦まで実に846回行なわれた。

初期のころの発表は戦果・損害ともに真実に近いことも多かったが、やがて戦局の悪化と共に戦果の誇張に損害の秘匿が加わり、見せ掛けの“勝報”があいついだことは広く知られている。

北九州に対する初空襲はB29戦略爆撃機による初めての日本本土への爆撃であるだけに、この空襲については多くの文献があるが、そのいずれもが実態を十分に把握できていない。大本営は「北九州への来襲敵機はB29及びB24二十機内外」と発表し、さらに「戦果は撃墜7機、撃破3機」と報じているが、これは戦果を大きく格好よく見せ掛けるためと、B29の来襲数を少なくして国民の不安を押さえようとしたためで、実際とは大きく異なっている。この誤りの起因を明らかにし、誤りを正して戦史についての研究に役立てたい。

2 北九州初空襲の概要

北九州初空襲（1944年）は私にとって初めて体験した空襲であったが、私がこの空襲に拘るのはそれだけの理由からだけではない。

ある席で空襲の話が出て、そのとき、私が「北九州初空襲の際には最初にB24が飛んできた」と述べたところ、同席者の一人から即座に「それは間違っている」と断定されたからである。

「B24は航続距離が短いから来るはずがない」というのがその理由であった。

「B24はB29に比べて航続距離が短い」ということは物理学的には正しいかも知れない。しかし、「だから飛んで来れない」ということは論理の飛躍である。

この眼ではっきりとB24が飛来したのを見ている以上、「B24が来襲した」という事実を単純な理由で否定されてしまっては堪らないという気持ちが強く働き、早速、事実を明らかにしようと当時の新聞を開いて見て驚いた。

一 本十六日二時頃支那方面よりB29及びB24二十機内外、北九州地方に来襲せり、我制空部隊は直ちに邀撃しその数機を撃墜之を撃退せり、我方の損害は極めて軽微なり（六月十六日八時大本営発表）

一 敵に与えたる損害 撃墜七機、撃破三機（六月十六日十四時大本営発表）
という記事が掲載されていたからである。

「B24が来襲した」という記事が新聞には掲載されているものの、来襲機の総数は実態に程遠く、このような資料では説得力が甚だしく弱いので、旧北九州5市の市史や『北九州市史』、および『戦史叢書』（防衛庁防衛研修所戦史室著、全102巻）、その他「北九州初空襲」に触れた文献を取り寄せて調べて判明したことは、私の目撃したのは一部で、空襲は私の目撃した以上の規模のものであり、いずれの文献も空襲の一部しか伝えていなかった。

3 各文献に記載された来襲機の機種・機数、および戦果

表1 来襲機の機種および機数

書名	年次	機種	機数
八幡市史 続編	1959	B29、B24	二十数機
若松市史 第二集	1959	—	25機
戸畑市史 第二集	1961	B29、B24	約20機
門司市史 第二篇	1963	B29、B24	13機
戦史叢書19 本土防空作戦（本文） （付記）	1968	B29、B24 B29	三十数機 47機
戦史叢書57 本土決戦準備〈2〉	1968	B29	二十数機
近代日本総合年表	1968	B29	—
超・空の要塞 B29（本文） （付表）	1971	B29 B29 B24	47機 63機 数機

戦史叢書74 中国方面陸軍航空作戦	1974	B 29、B 24	三十数機
ドキュメント昭和史 5	1975	B 29、B 24	廿機内外
現代史資料39 太平洋戦争 5	1975	B 29	6 8 機
TARGET TOKYO 日本大空襲	1979	B 29 B 24	6 3 機 数機
日本本土防空戦	1979	B 29、B 24	三十数機
記録写真集 日本防空戦〈陸軍篇〉	1980	B 29、B 24	三十数機
日本防空史	1981	B 29	4 7 機
昭和の歴史 別巻 昭和の世相	1983	B 29	6 3 機
事件・世相・記録 昭和史事典	1984	B 29	—
ドキュメント写真集 日本大空襲	1985	B 29	4 7 機
女たちの風船爆弾	1985	B 29、B 24	二十数機
昭和史年表完結版	1986	米軍機	4 7 機
北九州市史 近代・現代 行政社会	1987	B 29	4 7 機
戦略爆撃の思想	1988	B 29	6 3 機
米軍が記録した日本空襲	1995	B 29	4 7 機

表2 日本軍の戦果

書 名	年 次	撃墜	撃破
戦史叢書19 本土防空作戦	1968	7 機	4 機
戦史叢書57 本土決戦準備〈2〉	1968	撃墜破 7 機	
超・空の要塞 B 29	1971	7 機損失	
戦史叢書74 中国方面陸軍航空作戦	1974	7 機	4 機
ドキュメント昭和史 5	1975	7 機	3 機
日本本土防空機	1979	7 機	4 機
TARGET TOKYO 日本大空襲	1979	7 機損失	
記録写真集 日本防空戦〈陸軍篇〉	1980	7 機	4 機
日本防空史	1981	7 機	多数
昭和の歴史 別巻 昭和の世相	1983	7 機損失	
北九州市史 近代・現代 行政社会	1987	6 機	

表1および表2は来襲機の機種や機数および戦果について各文献に記述された内容を示しており、これらの文献は大きくは三つに分類される。

一つは47機説または63機説（68機説を含む）で、これは米軍側の記録に基づくものである。

他の一つは三十数機説または二十数機説（廿機内外および約20機説を含む）で、これは日本軍の記録に基づくものである。

残りは、門司市や若松市など、地元の観察記録に基づくものである。

一般に戦闘記録に関しては彼我両軍に食違いが生じるのは避けられないが、北九州初空襲に関しては両者の記録内容に甚だしい相違が見られる。このことについて言及する前に、日米両軍の状況および私の目撃体験を明らかにしておきたい。

4 私の目撃体験

当時、私は鞍手郡剣村（現鞍手町）の最北端に住んで居て、剣国民学校初等科第五学年であった。

農家は田植えの時期で忙しく、5年生と6年生は全員農家の手伝いに動員されていた。6月15日、この日も田植えの作業を終え帰途につくため全員が集合している時に警戒警報のサイレンが鳴り、これは訓練ではなく本物のサイレンであるという教師の忠告を上空で聞きながら帰宅し、食事を済ませて眠りに就いた。夜中に空襲だといって起こされた時には、既に空襲が始まっており、B24が照空灯に照らされながら（左前方から右前方へ）八幡の上空へ向かい、左旋回して帰路につくと次の飛行機が照空灯に照らしだされて八幡の上空へと向かって行った。

私の居た位置からは、折尾駅まで 8 km（北から東へ4°の方角）

八幡駅まで 14 km（北から東へ56°の方角）

若松駅まで 16 km（北から東へ45°の方角）

小倉駅まで 42 km（北から東へ61°の方角）あり、

敵機は、3機で編隊を組みながら西北の空高く姿を現わし、近づくにつれて次第に高度を下げ、1機ずつ一定の間隔をおきながら八幡に向かった。

敵機の目標が八幡製鉄所にあることは明白で、私の家の傍らに作られた防空壕に入るものは誰も居らず、皆一固まりになって敵機の来襲を眺めていた。

側に居た大人の一人が高射砲のことに詳しく、「砲弾は飛行機に直接当たらなくても、所定の高さに達すれば炸裂し、その破片が飛び散って当たるだけでも敵機に被害を与えることが出来る」という話や、「照空灯は敵機を捕捉するだけでも飛行を困難にする」という話などを聞きながら空襲を見つけた。

B24やB29を見るのは勿論初めてであるが、B24は写真で見慣れており、ずんぐりした胴体や2枚の垂直尾翼の特徴をもつ4発のプロペラ機を他と見間違はずはなかった。

侵入の形態は、概ね3機で一編隊を組み、前の一編隊が飛び去って見えなくなると、次の編隊が現われるという具合に各編隊は適度な間隔をおいて来襲し、その間隔は、後になるほど次第に長くなっていった。

各編隊とも視野に入った最初は三角形の形態をとっていたが、八幡市の上空に近付くにつれて一列になり、1機ずつ侵入していった。これは、爆撃の目標が八幡製鉄所一点に絞られていたからだと思われた。

これに対して地上の照空隊は2基の探照燈から発光される2条の光線で結ばれた十字の交差点の中に敵機をガッチリと捕捉し、リレー式にバトン・タッチをして敵機を追跡し、十字の交差点から敵機を逃がすことはなかった。

そして、高射砲隊は間断なく敵機目掛けて弾を撃ち上げたが、炸裂点の高さは敵機に比べて低く、敵機に被害を与えるまでには至らなかった。炸裂点の高度が低く、下方のほぼ同じ高さで炸裂していたことから、高射砲部隊は、侵入機の高度についての測定を誤っているのではないかという印象を強く受けた。

結局、B24の来襲機は1機も被害を受ける事なく帰途につくことができた。

最後の編隊が飛び去ってから可成の時間が経ち、空襲はもう終わりのようだといって皆が家の中に入りかけようとした頃になって、西北の空高くピカピカと光り輝きながら進入してくる3機の編隊が目に入った。周りの者は一様に、これが噂の「B29」と判断した。それは、写真で見慣れたB17とも違い、新機種であることが明白だったからである。

このとき、私は「真打ち登場」という印象を強く受け、B24が先陣を争って飛び入りをしたものと思込んでいたが、それは半分は当たっているようでもあり、半分は間違いであったようだ。

B29の場合もB24と同様で、3機の編隊が一定の間隔をおいて飛来し、八幡の上空に近づくと更に1機ずつ間隔をおいて侵入してきた。ただ、B24の場合と違って、何発かの砲弾が他よりも高く上がって炸裂し、このため、墜落するものや、煙を吐き機体を揺らしながら飛び去るものも生じ、被弾機の中には中国大陆まで達しないうちに墜落するであろうと見られるものもあった。

なお、『門司市史』には、8月1日付の「朝日新聞」に掲載された〈タイム誌〉特派員ハーリー・ジンダーの手記が転載されていたので、これを紹介する。

我々は6月15日の午後早く山間の基地を出発、夜になって日本軍占領地域を横切った。「超空の要塞」機は操縦士大尉ルートの慎重な操縦に委ねられ、エンジンは快調な鼓動をたてていた。難コースにさしかかった時は見事な星空で素敵に明るかった。黄海横断

は長い旅だったが、我々は一路真夜中に北九州の日本最大の製鉄鋼群都市を襲うべく進んだ。一番砲手の軍曹アレンが操縦士に試射の許可を願い出た。間もなくアレンとその部下が強力な砲の試射を始め、我々の周囲にガンガン音が混る。それが済むとアレンは通話管から「我々の左にB29、依然進行中」と伝えてくる。と同時に、機の他の部からも報告が続々通話管でやってくる。やがて日本の陸地上空へさしかかって、機はゆるく上下動した。我々は身ごしらえを完全にし帽子をなおし、爆撃位置についた。見れば操縦士はしっかり腰をすえ、機関士は機関に眼をすえ、航空士スタンレーは何度も何度も機の位置をたしかめている。「大丈夫か」ルートが聞くと「針路ののっています」とスタンレーが答える。我々の針路は交叉する六つの探照燈の真中に揃えられてしまった。既に地上の高射砲の音が聞え、砲弾の炸烈を身近に感ずる。

指揮官ルートは「爆弾倉を開けろ」と命令した。そして操縦桿をしっかりと握りしめ、機首を何もくらむばかり輝いている光の真只中へ向け「やるぞッ」とどなった。高射砲弾はものすごく炸烈する。ルートが爆撃手アルブライトに「目標をよく見極めて」と注意すると、アルブライトが「探照燈の光がまぶしくてよくわからない」と情けない返答をする。ルートは更に「じゃ、ゆっくりやれ、ここら辺りに間違いないんだから」機はもう探照燈の強烈な光をいっぱい身に浴び、空に大きな白いばけもののような爆撃姿勢を見せている。と、「そこだッ」とアルブライトがマイクいっぱいにつぶやぶや。「それ投下しろ」という声諸共にルートは機首を更に静に下げると同時に数千ポンドの爆弾は八幡めがけて投下された。ルートは急激な左旋回をおこなった。操縦士の窓から我々の下と頭上に同じく爆撃態勢の他のB29が見られた。記者（ジンダー）の側に坐っているルートは私に静かな声で「わが機の処女爆撃は終わったね」といった。

5 日本軍の防衛態勢

『北九州市史 近代・現代 行政社会』は、第二編第六章第七節で北九州の防衛陣について、次のように解説している。

元師団司令部跡の第66歩兵団司令部は、18年6月25日をもって廃止、同年8月、その跡に下関要塞司令部が移転し、関門地区の防備を担当することになった。

また、元旅団司令部跡の西部軍砲兵隊司令部は、壱岐、対馬、長崎、豊予、下関の各要塞重砲兵連隊を含め各種砲兵部隊を指揮監督することになった。

北方の歩兵第123連隊は、昭和18年6月25日、第46師団隷下となって熊本に移動した。その跡の旧歩兵第14連隊営舎に第21警備大隊5個中隊が熊本から移動して、主に八幡製鉄所の警備に当たることになった。

西部防空旅団は、昭和18年8月15日、西部防空集団と改称、更に翌19年6月1日、西部

高射砲集団に改編し、北九州の防空強化を図った。これによって隷下部隊は、次のように編成された。

高射砲第131連隊	若松・八幡（七高8個中隊、八高4個中隊、照空6個中隊）
高射砲第132連隊	小倉・戸畑（七高7個中隊、八高5個中隊、照空6個中隊）
高射砲第133連隊	下関・門司（七高3個中隊、十高4個中隊、照空3個中隊）
独立高射砲第23大隊	八幡（七高1個中隊、八高1個中隊、照空1個中隊）
機関砲第21大隊	枝光

註 1個中隊は約6門の高射砲を備え、七糎高射砲は口径75ミリ、最大射高9100m、八糎高射砲は口径88ミリ、最大射高11000mである。

有効射高は八割としても、敵機に届かぬ道理はない。敵機を撃墜できなかったのは高度を見誤ったものと判断される。

一方、空中での防空戦闘には小月に司令部を置く第19飛行団（のち第12飛行師団）が当たり、麾下の飛行第4戦隊は小月、飛行第59戦隊は芦屋に配備されていた。

そして、飛行第4戦隊は二式複座戦闘機（屠竜）35機（常時出動可能25機）を、飛行第59戦隊は三式戦闘機（飛燕）25機（同7～8機）を保有していたが、防戦に飛び立ったのは飛行第4戦隊の8機のみであった。

その理由について、『戦史叢書19 本土防空作戦』は、第三編第五章の二で次のように述べている。

同日（6月15日）夕刻発令された警戒警報に基づき、要地防空部隊はいずれも警戒を厳にしていた。敵機来襲の虞れがある場合、情報収集のため第19飛行団から部員を福岡の西部軍司令部に派遣することになっていたもので、同飛行団部員山本精次少佐は小月から西部軍司令部に移動した。

西部軍司令部に前記警戒機情報が入るや、山本少佐はこれを逐次第19飛行団司令部に報告した。同日、北九州付近上空は快晴であり、約3500米付近に煙霧があった。6月15日の月齢は24、月出は0055（零時55分）であった。

0024、空襲警報が発令されたとき、来襲機の高度はまだ判っていなかったが、古屋第19飛行団長は電波警戒機により判明した敵機ほかに、それよりも先に航進中の敵機があるかも知れないと考え、0027、安部飛行第4戦隊長に命じて、1隊（4機）を要地上空高度2000米に出動させた。飛行団長はその後0047、更に他の1隊を高度2000～4000米に出動を命じた。このようにして、飛行第4戦隊に重層配置をとらせたのである。

このとき、飛行団長は次の理由により蘆屋（芦屋）に位置する飛行第59戦隊には出動を命じなかった。

1 飛行第59戦隊（三式戦）の夜間出動可能は4機であるが、機種改変後まだ日が浅く

発動機に自信がもてず、その戦力発揮が疑問視されたこと。

- 2 飛行第4戦隊（二式戦）との夜間の協同戦闘訓練をまだ実施していないため、空中において相互の混乱が懸念されただけでなく、空中戦闘後、三式戦も小月に着陸させなければならないので、同飛行場の混雑が予想されたこと。

飛行第4戦隊は開戦前から小月に位置して防空に当たっており、機種も二式複座戦闘機「屠龍」に改変後一年以上経過していた戦隊であったのに対して、飛行第59戦隊は内地に帰還後、2月に第一飛行師団に編入されて北東へ移動した飛行第24戦隊の後を受け継いで芦屋に位置して戦力の回復を行い、三式戦闘機「飛燕」に機種改変を行ったばかりで、飛燕の整備困難もあって、保有機約25機のうち、夜間出動可能なのは4機に過ぎなかった事などから、その戦力発揮が疑問視されていたからであった。

このような理由で芦屋に配備されていた飛行第59戦隊は役に立たず、また飛行第4戦隊も即時発進可能な警急中隊として準備されていた8機が発進し、3回往復して防戦に当たったが、その行動範囲は主として関門地区であったようだ。

6 米軍の八幡製鉄所爆撃計画

米軍側の資料によれば、カルカッタを根拠基地、成都を前進基地とするB29爆撃機による日本本土爆撃計画（秘匿名称「マッターホーン」計画）は1943年11月に策定され、作戦開始が翌年5月初頭と予定された。

この計画に基づき、第20爆撃兵団（司令官ウォルフエ準将）が創設され、成都地区に五つのB29用飛行場建設が進められた。そして、統合参謀本部は6月15日のサイパン上陸予定日に少なくとも70機のB29爆撃機をもって対日爆撃を執行し、サイパン上陸作戦に協力すべしという命令を発した。

当時、中国大陆に基地をおき、中国軍を支援していた米陸軍第14航空軍の司令官シェンノートン少将はB29部隊を指揮することを望んでいた。しかし、ワシントンの当局者達はB29を一つの戦域だけに使うのは経済的でないと考え、これらの爆撃機は一人の指揮官のもとで統合参謀本部の指揮下に置くことにして、アーノルド大将を司令官とする第20航空軍を創設し、これに第20爆撃兵団が編入された。

マッターホーン作戦の使用に予定されていた第20爆撃兵団配属の第58爆撃飛行団は6月13日に成都への移動を開始し、翌日には83機のB29が成都へ進出、15日午後3時、75機が成都の各基地から離陸を開始した。

その攻撃目標は八幡市にある日本製鉄株式会社八幡製鉄所の工場であり、私が目撃したB29の来襲機は第58爆撃飛行団のものであった。

表3は、カール・バーガー著『B29』に基づいて作製したもので、日本へ向かったとき

れる第58爆撃飛行団のB29は63機であった。離陸を開始した75機のうち、7機は離陸できず、1機は離陸直後に墜落、4機は故障のため引き返さなければならなくなったからである。

また、63機のうち、32機は目標を見分けることが出来ずレーダーによって爆弾を投下し、15機が目視によって爆撃を行なったということが記されており、7機は爆撃装置の故障のため爆弾を棄てたという。

なお、表中の撃墜または墜落機の資料については後で述べることにする。

表3 八幡製鉄所初空襲に向かった第58爆撃飛行団のB29の行動

空襲	八幡製鉄所爆撃への貢献状況	機数
空襲に参加	レーダー爆撃	32
	目視爆撃	15
	撃墜	3
	被弾して帰途、中国大陸に墜落	2
	※被弾して帰途、河南省内郷飛行場に不時着	1
	爆撃装置故障のため、爆弾を放棄	7
	不明	3
	小計	63
空襲に不参加	離陸直後に墜落	1
	離陸不能	7
	離陸後、故障のため引き返す	4
	小計	12
全	体	75

※ 不時着している所を日本軍の双発軽爆から爆撃され、炎上した。

この表から読み取れるように、成都を飛び立って日本本土へと向かった第58爆撃飛行団のB29の機数が「63機」説の根拠になっており、63機の中にはB24の来襲機は含まれていない。また「47機」説は、来襲機を目視爆撃の15機とレーダー爆撃の32機に限定したことによるもので、戦史叢書19『本土防空作戦』の第三編第五章「B29の本土初空襲」の付記「B29の成都進出経緯とその第一回九州爆撃」中に、“…所命目的の八幡製鉄所付近上空に達したのは47機であった。”とあるのが初出である。

7 機種・機数についての検討

(1) 47機説・63機説

表3からも知れるように、「47機説」・「63機説」はいずれも米軍側の第58爆撃飛行団の戦闘記録から引用したものである。

これらの数字を引用している文献のうち、『日本防空史』の著者浄法寺朝美氏は北海道帝国大学土木工学科を卒業して陸軍築城部本部第3（防空）科長などを経て、戦後は防衛大学校教授を勤めた方で、著書の「12空襲（2）a）八幡製鉄所爆撃」では、次のように述べている。

かくて在中国のB29・4発長距離爆撃機63機は、サイパン上陸日の1944年6月15日と日を合わせて、成都、昆明から北九州を襲って、15日夜半から16日未明にわたって八幡製鉄所（B29、47機）と大村海軍基地及び長崎造船所（B29、16機）に爆弾を投下した。八幡は灯火管制で、真っ暗闇であった。B29はレーダーと目視で爆弾を投下した。製鉄所も造船所も至る所に鋼材や鋼管があり、鋼管内にもぐったり、鋼材にかくれて、従業員の死傷も少なく、火災も起らなかった。ただ製鉄所に隣る旭化成黒崎工場は、木造2階建が密集しており、大破壊を蒙った。

防空飛行第4戦隊の二式複座戦闘機（屠龍）群はB29、4機撃墜、3機撃破の戦果をあげた。高射砲隊は一晩に9000発を打ち、3機を撃墜、何機かを撃破したが、爾後砲弾の補充が難しく、翌日から500発に落とされた。米機はB29、7機撃墜・数機撃破され、搭乗員55人を失って、本空襲は失敗した。

ここで、注目すべきは63機を47機と16機に分け、後者は長崎・大村を爆撃したとあることと、撃墜を戦闘機によるものと高射砲によるものとに分けていることである。

戦果については後で述べるが、高射砲隊の戦果に関する記述は正しく、また「翌日から500発に落とされた」ということも、当時うわさとして「弾数が制限された」ことを聞いており、事実次回は射撃数が半減し、後には次第に撃ち上げなくなった。

また、『超・空の要塞 B29』の著者益井康一氏は毎日新聞社の特派員として、中国に在住し、第5航空軍の資料などにもとづいて次のように述べている。

（兆候）五航軍は最近のB29の増強は、日本本土の空襲を企画するためであろうとの疑いを持っていた。しかし、直接的兆候としては、6月12日ごろより、建甌（福建省の敵基地）の急速な使用を要求したほかは、何もなかった。

（B29の出撃基地）主力の出撃基地は、成都周辺の新津および彭山等と判断される。右飛行場で、6月15日18時30分、B29一機浮揚せず、稲田に墜落炎上、飛行士が脱出という事故があった。

(月の出時刻) 6月16日の月の出時刻は、八幡1時50分、南京2時49分、漢口3時8分、成都3時50分、月齢24.3であった。出撃時刻は月の出の前後約2時間の間を選定したものと判断される。この日、中南支一帯は悪天候、通過地は支障なし。北九州は好天だった。反省として、広域圏気象上の見地から、空襲企図を判断する必要があった。

(B29の爆撃行動) B29部隊は一部をもって、武漢・南京・上海・広東方面に陽動した。主力は6月15日夕、成都付近の基地から発進した。その際、日本空襲の企画が洩れるのを恐れて、中国全土にある米空軍基地とは、全然連絡をとらなかった。そのため各基地は、B29が頭上を飛んだとき、“日本空軍の来襲だ”と早合点して、大さわぎをした。

陽動作戦部隊の漢口地区進入は、15日21時50分～23時30分の間。機数不明。広東地区進入は、21時50分～24時18分の間。東から来襲して、照明弾を投下しつつ、十次にわたって天河、白雲、南村の各日本軍航空基地周辺を爆撃。兵3人負傷。また、南京、上海地区へは22時15分～16日零時34分の間に入。延べ十数機。うち1機が連雲港付近の海中に爆弾5発投下しただけだった。

陽動作戦で日本軍の眼を釘づけしているすきに、主力は15日22時から22時30分の間上海北方を通過し、黄海上空に抜けていった。そして、済州島の西方約100キロの上空に現われ、それから熊本、中津川方面に1機づつ飛ばして、また、陽動作戦を行なった。そのすきに主力は対馬上空に出て待機した。その夜の“パリ”(八幡)の月の出は16日1時50分で、月齢24、上空約3500メートルに煙霧がかかっていたが、快晴、明るい月夜だった。やがて1機が先行しながら、電波で主力を誘導した。2～5機ずつの群に分かれて、5分間隔で八幡を目指した。巡行真速度410キロ内外、最大真速度約600キロ、そして16日1時34分～4時15分の間、八幡製鉄所のコークス炉をねらって波状爆撃を加えた。しかし、付近の他の工場から燈火が洩れ、そこを八幡製鉄所と誤認して爆撃した敵機もあった。

(わが防空戦闘) 北九州の防空戦闘隊は敵機来襲を察知し、要撃した。飛行第4戦隊の報告によると、敵機はB29、B24約二十四機となっている。敵機の進入高度は500mないし4000mで、2000mぐらいが多かった。爆撃は単機で行ない、その場合に2～3機が上空で援護した。爆撃後は急旋回して、全速離脱した。最初に進入した敵機は翼燈を消していたが、3時以降の敵機は翼燈を点じていた。第4戦隊は二式複座戦闘機「屠龍(キ-45)」24機で要撃したが、B29の速度があまりに速いので、主にB29の後下方に潜り、複座の上向砲(37ミリ機関砲)で攻撃した。上向砲の威力は絶大で、B29七機を撃墜、三機を撃破した。このときは地上の照空燈に照らされ、味方の高射砲の弾幕をくぐって空中戦闘を続けたが、さいわい被害はなかった。高射砲の発射九千発というから、まさに乱射乱撃であった。

(B29部隊の帰路) 帰路は6月16日1時13分～3時30分の間、18機が13回にわたり壱岐

南方上空を通過して、中国大陸を揚子江に沿って南京、信陽、沙市付近を成都に向かった。しかし、悪天と被弾のため途中、恩施（湖北省）に2機、河南省内郷に1機不時着した。その他にも不時着機があったとみてよい。内郷のB29が、日本軍の新司偵に発見されて爆撃されたことは、前に述べたとおりである。

支那派遣軍総司令官畑俊六元師の日記は、北九州初爆撃の日に、まだ詳細もわからないまま書いたので、後日、これを読んでみると、敵の機数その他正確を欠く点があるのはやむを得ない。また、B29のほかに、コンソリデーテッドB24が随伴したと記しているが、これは北九州で要撃したわが飛行第4戦隊の報告にもとづくものと思われる。事実としても、爆撃本隊はやはりB29であって、おそらくB24は本隊を誘導するために、遂川から発進したのではないかと推定される。

そして、これも後でわかったことだが、B29部隊は6月5日、バンコクを爆撃している。この時の出動機数は84機で、日本軍が管理していた鉄道工場を爆撃した。これがB29部隊の第一回出動で、北九州爆撃の予行を兼ねた作戦であった。それから11日目に北九州を襲ったのだ。

(2) 三十数機説および二十数機説

一方、「三十数機」説は飛行第4戦隊の戦闘報告に依拠しており、その報告内容は私の目撃体験と全く噛み合っておらず、最初『戦史叢書19 本土防空作戦』の第三編第五章の「二 八幡地区のB29激撃第一戦」の〈飛行第4戦隊の戦闘〉に述べられている戦闘報告を読んだときには全く意外で、信用しきれなかった。

『日本本土防空戦』『日本防空戦』についても同様であった。

『日本防空戦』には、次のようなことが述べられている。

報告を受けた小月の第19飛行団長・古屋健三少将は、0時27分、飛行第4戦隊長安部勇雄少佐に出撃を命じた。安部戦隊長は部隊の全機に警急姿勢への移行と、警急中隊8機の即時発進を伝えた。

戦隊本部の待機所で仮眠中の佐々利夫大尉は、あわてて飛び起き、同乗者なしの丁装備で出撃した。高度を4000mにとり、関門海峡の東側で旋回していたとき、1機の大型機を発見した。午前1時11分、位置は小倉北方である。「アカ（敵機のこと）発見！」と戦隊本部に伝えた。これが本土防空戦の幕開きである。

その後1時30分、佐々利夫大尉はあらたな敵機を若松上空で捕捉、上向き砲による攻撃でエンジンから火を吹かせ、不確実撃墜を記録した。

空戦からもどってひと眠りした4戦隊の幹部操縦者は、小月の戦隊本部で会合を開いた。まず問題となったのは敵の機種で、大陸からの空襲についてはB29が本命とされていたが、

B24と判断した操縦者もあり、結局B29とB24の混成三十数機と判断された。

私がこの報告内容を最初信用出来なかったのは、地上にいても機種をはっきり確認できたのに、機種についての証言が頼りなかったからである。けれども、最終的に、別の来襲部隊が居たことを確認したのは、『日本本土防空戦』の挿図「6月15日のB29の侵入・離脱経路」に示された侵入・離脱の経路が私の目撃したものとは全く逆であり、又これらとは別資料の『門司市史 第二集』や『女たちの風船爆弾』などがあったからである。

なお、「二十数機説」は、「三十数機説」と深く関係しており、始め飛行第4戦隊の報告が24機（『超・空の要塞 B29』の記述に基づく）であったのを少し減らして二十機内外とし、戦果を十機程度に水増しすることによって、これまでに豪語していたこと、つまり「過半数を撃墜破」を実行出来たことを宣伝しようとしたものと思われる。

(3) その他の説

『門司市史 第二篇』は第1回の北九州地区の空襲について〈門司消防署沿革簿〉に基づいて次のようにのべている。

この日空襲警報が発令されたのは、午前0時20分であった。第1回の敵機空襲は、午前1時17分で、山口県彦島上空から本市に侵入した。敵機は約20機内外で、これが単機または2機で、10分程度の間隔をおいて襲来した。機種は、ボーイングB29およびコンソリデテッドB24であると確認された。

敵機は2時55分までの間、10回に及ぶ波状攻撃をくり返した。その時刻と経路は次のとおりであった。

第1回目 1時17分、敵1機が山口県彦島上空から飛来し、小倉方面に向かって去った。

第2回目 1時27分、敵2機が彦島上空から侵入し、小倉方面に去った。

第3回目 1時52分、敵1機が下関上空から侵入し、三角山一風師山上空に飛来し去った。

第4回目 2時、敵1機が門司岬から侵入し、風師山上空に飛来し去った。

第5回目 2時5分、敵1機が彦島上空から大里方面に飛来し去った。

第6回目 2時8分、小倉方面上空に敵1機が、また2時29分にも、小倉市上空に敵1機が侵入した。

第7回目 2時30分、敵1機が彦島上空から侵入し、風師山方面へ向かった。

第8回目 2時40分、敵1機が前回と同じように侵入した。

第9回目 2時53分、敵2機が小倉市上空から飛来し風師山方面へ向かった。

第10回目 2時55分、敵1機が門司港中心部上空から田野浦方面へ向かって去った。

以上10回にわたる空襲による被弾地域は、旭町1・2丁目、大里大杉町4・5丁目、黄金町3・4丁目、間瀬町3丁目、戸上通り5丁目、恒見、吉志、小森江、今津、大里原町、大里東町がおもなものであった。

この空襲において投下された爆弾は、250kg級瞬発爆弾約45個で、うち20個ぐらいは不発弾で、また5kg級地上照明弾が23個ぐらいつ下された。爆弾の威力は予想以上に大きいものがあつたようだ。これは当時、防空関係者が所持していた〈時局防空必携〉に記されていたものよりも炸裂威力が大であつたことを、当事者がはっきり認めていることによつてもわかる。

(4) 戦果について

『戦史叢書』によれば、高射砲部隊は九千発も乱射したということであつたが、二条の照空燈の交差点で捉え下から高射砲を撃ち上げる様は、空襲を遠くから傍観していた私には、あたかも提灯をつけて一機ごとに敵機を道案内し、打ち上げ花火で歓迎して丁寧を送り迎えしているという感じがしていたことを今でも記憶している。

九千発も撃ち上げたとすれば、来襲機が百機であつたとしても、一機に90発の割合で弾を発射した勘定になる。それが廿機となれば、450発ということになり、北九州の上空で遊覧飛行を実施して貫かなければ撃ち上げることは出来ない。

戦果について『日本防空史』は、飛行第4戦隊が「4機撃墜、3機撃破」の戦果をあげ、また高射砲隊が「3機を撃墜、何機かを撃破した」と記述していることから、「敵に与えたる損害 撃墜7機、撃破3機」という大本営発表は、両者の戦果発表を単純に加えたものと判断される。

一方、戦史叢書の『本土防空作戦』や『本土決戦準備〈2〉』には、高射砲部隊は1機も撃墜出来なかつたと述べ、高射砲部隊の戦果が完全に無視され抹殺されている。そして、八幡地区の高射砲隊長であつた第131連隊長の加藤中佐は関東軍参謀本部附に更迭され、他方、多数の戦果(2機のB29を撃墜)を挙げたという飛行第4戦隊の木村准尉には、済州島の警戒隊長齋藤中尉と共に陸軍大臣の東條英機大将から軍刀と金一封が授与されている。

けれども、私の見ていた限りにおいては戦闘機がB29の下方から近寄れる可能性はなく、せいぜい、墜落していく飛行機にとどめの銃撃を浴びせる程度しか出来ない。

「3機を撃墜し、3機に致命的な損傷を与えた」のは高射砲部隊であることが私の目撃体験とピッタリ一致しており、高射砲部隊が撃ち上げた砲弾がB29の間近で炸裂し、その破片によつて致命的な損傷を受け、6機のB29が撃墜破されたのである。

撃墜は免れたものの致命的な損傷を受けた3機のうち、2機は途中で中国大陸に墜落し、

残りの1機は河南省内郷飛行場に不時着したものの日本空軍に発見されて空爆を受け、爆破炎上した。

撃墜された3機のうち、1機は玄海町鐘崎の沖合に墜落しているが、地上に墜落した2機の墜落場所については若干あいまいな点がある。

19日の新聞には、「陸海軍航空調査班が折尾北方5キロ高須に墜落した飛行機を実地検証した」とあり、さらに23日の新聞には、「若松市郊外高須付近に墜落したB29の搭乗員名簿が高須神社境内で発見された」と報道されている。

一方『戸畑市史 第二集』には島郷地区の戸明神社境内下麦畑に墜落したとあり、『若松市史 第二集』には高須松ガ鼻（若松警察署から約12キロ）の戸明神社境内下の麦畑に墜落していたとある。

また、『本土防空作戦』には、地上に来襲機の残骸を認めたのは若松西方及び折尾北方の2機に過ぎなかったとあり、（折尾西方に墜落、炎上しているB29の写真を挿入）、さらに、調査のため墜落現場に向かったが、折尾付近に墜落したものは爆破炎上していて調査出来ず、高須（蘆屋南東方約2キロ）に墜落したものについて調査し、これをB29と判定したと述べているなど、地名に混乱が見られる。

なお、『本土防空作戦』の中に、「敵機機関砲の掃射により一部の高射砲中隊には死傷者が生じた」という記述があるが、爆撃機のB24やB29が地上の兵士に向かって機銃掃射を浴びせることはない。これは明らかに、炸裂した味方高射砲弾の破片によって死傷者が生じたものである。

私が在住していた剣村の唯一の戦争被害は、この時に国民学校の裏山に落下した砲弾の破片で松の木が数本薙ぎ倒されたことだけであった。

高射砲の乱射により、その砲弾の破片による被害は可成大きかったものと判断される。

8 まとめ

以上、諸資料をまとめて分析した結果、来襲機は私が目撃したものの外にも一集団がいて、全体としては、ABC三つの集団から成り立ち、総数は百機を上回るかも知れない大規模なものである。

私が最初に目撃した爆撃機はB24で、B24の一群（Aグループ）が飛び去った後にB29の一群（Bグループ）が続いて現われたのであるが、これらは八幡製鉄所を攻撃する本隊であり、この外に陽動作戦部隊としてのCグループなるものが存在し、レーダー部隊や飛行第4戦隊の注意を引き付ける役割を十分に果たした結果、彼我的報告に大きな食違いが生じたものである。

Cグループについては、機種についての明確な証言が得られていないので、幾分あいま

いな判断しかできないが、少なくともAグループが八幡上空に姿を現わしていた時期にはCグループの機種はB24であったと考えてよいであろう。問題は、Bグループが姿を現わすようになった後でもB24が対馬東方海上にとどまっていたのかどうかである。B29の一部がCグループに加わっていたならば、来襲機の規模は幾分少なめに評価しなければならないだろう。

Aグループについては、始め飛び入りと考えていたけれども、Cグループの存在を考慮するとき、AグループとBグループ（勿論Cグループも含めて）の間には密接な連絡が取り交わされていたものと考えねばならない。

なお、新聞によれば、陽動作戦部隊は朝鮮半島南部にも進出範囲を広げていたようである。

北九州初空襲参考文献

- 1 八幡市史編纂委員会編纂『八幡市史 続編』（1959年）八幡市役所
- 2 若松市史第二集編纂委員会編纂『若松市史 第二集』（1959年）若松市役所
- 3 戸畑市役所編集『戸畑市史 第二集』（1961年）戸畑市役所
- 4 門司市史編集委員会編集『門司市史 第二篇』（1963年）門司市役所
- 5 北九州市史編さん委員会編集『北九州市史 近代・現代 行政社会』（1987年）北九州市
- 6 防衛庁戦史室『戦史叢書19 本土防空作戦』（1968年）朝雲新聞社
- 7 防衛庁戦史室『戦史叢書57 本土決戦準備〈2〉』（1968年）朝雲新聞社
- 8 防衛庁戦史室『戦史叢書74 中国方面陸軍航空作戦』（1974年）朝雲新聞社
- 9 岩波書店編集部『近代日本総合年表』（1968年）朝雲新聞社
- 10 益井康一『超・空の要塞 B29』（1971年）毎日新聞社
- 11 カール・バーガー『B29』（1971年）サンケイ新聞社出版局
- 12 今井清一編『ドキュメント昭和史 5』（1971年）平凡社
- 13 『TARGET TOKYO 日本大空襲』（1979年）月刊沖繩社
- 14 渡辺洋二『日本本土防空戦』（1979年）現代史出版会
- 15 渡辺洋二『記録写真集 日本防空戦〈陸軍篇〉』（1980年）原書房
- 16 浄法寺朝美『日本防空史』（1981年）原書房
- 17 原田勝正編『昭和の歴史 別巻』（1981年）小学館
- 18 朝日新聞企画第一部編『ドキュメント写真集 日本大空襲』（1985年）原書房
- 19 『昭和史年表完結版 一大正12年9月1日～平成元年12月31日ー』（1985年）小学館
- 20 昭和史研究会『事件・世相・記録 昭和史事典 [1923-1983]』（1985年）
- 21 前田哲男『戦略爆撃の思想』（1988年）朝日新聞社
- 22 入江徳郎・古谷綱正・山崎英祐・高木健夫監修『新聞集成 昭和史の証言 全20巻 第18』（1988年）本邦書籍株式会社

（1997年6月16日受理）